

ともに生き、ともにはたらく～

2021協同集会in東海実行委員会

ツナギナオス

「協同による新しい日常」

2021協同集会in東海



クロストーク① 「つなげる力を育む」



秋の自然・生活体験活動「生活の中で工夫して自然を生かす体験」報告

日時：2021年11月28日（日）10：30～15：30

場所：季の野の台所（愛知県知多郡美浜町字布土豆池23）

参加：15名（中高生6名、大学生2名、大人7名）

11月28日、秋の自然・生活体験活動を季の野の台所（美浜町）にて実施、参加者15名（中・高校生6名、大学生2名、大人7名）の参加があった。

この体験活動は、NPO法人マルベリークラブ中部、繭のいろは、季の野の台所、ワーカーズコープで企画を行った。

■ そもそも何で体験活動？

今回の体験活動は、2014年から始まった協同集会 in 東海で自分たちが協同を実感できる行動を何かできないか？という藤澤さん（マルベリークラブ中部）の思いから始まり、NPO法人マルベリークラブ中部と関係する繭のいろは、季の野の台所を紹介頂き、体験活動の準備をした。準備の中で、団体同士の協同も深めることができた。

・生活の中で工夫して自然を生かす体験

2030年に欲しいもの（都会人約800人へのアンケートによる）

- 1, 安心安全な食=食の自給自足
- 2, 信頼できるコミュニティーの一員であること
- 3, 安心・良質な子育て環境

裏を返すと今、特に都会にないものに通じる事柄である。



地域の活性・再生の活動指針とする。

	テーマ	着眼点
1,	食の自給自足	休耕地の活用
2	信頼できるコミュニティー	CSA（協働）
3	安心良質な教育環境	学習支援



具体的検討グループ

NPO ワーカーズコープ、
季の野台所（美浜町市民団体）、
NPO マルベリークラブ中部

■ 活動の目的

体験活動は、コロナ禍により広がる子どもたちの体験・機会の格差縮小、自然の中に人も加わっているという意識を取り戻し、桑・蚕・繭の歴史的歩みを辿りつつ、ヤギ等の多様な命に触れ、他者への感謝の気持ちを再認識すること、自然循環のものづくりを体験し、子どもたちが生活の知恵を学び、自らの役割と協同を実感することを目的とした。

■ 体験活動の内容 ※集会当日に森川さんより詳しく報告

- ・野外体験（田んぼでヨガ）

→みんなで体をうごかし緊張がほぐれる!?

・創作活動（桑・蚕・繭のはなし、ミサンガづくり）

→子どもたちは、真剣な様子で話を聞いていた。実際に蚕や繭にも触れて、自然の循環について学んだ。大学生も一緒にミサンガをつくる。

・調理体験（バームクーヘンづくり、海鮮バーベキュー）

→火をおこし（子ども・大学生も上手につけることが出来ず。）、薪割（大人がハマる）

→バームクーヘンづくり（竹きり、生地・生クリームづくり、焼く作業）

活動内容は、集会当日に森川さんより報告があるが、大人が全て準備するのではなく、子どもたち自身が、準備や片づけを行う体験となった。

火おこしは、参加者では上手につけることが出来ず。火おこしの難しさを知った。調理体験では、子どもが大学生や大人に作り方など教える場面も見られた。（場が変われば、立場が変わる。）

■ 参加者の感想 一部

・中学3年で、最後の機会と思い参加した。すごく楽しみにしていた。参加者同士で普段できない会話もでき、良い体験ができた。（中3）

・薪割りをして、できた時は凄くうれしかった。（中2）

・自然体験ということで何も知らない土地の自然で全力で楽しむことの重要性を感じることができた。今まで学習会の中でしか関わりを持っていなかった子どもたちが自然に触れることで新しい一面を見ることができた。（大学生）

・薪割りや竹などを触り、自然にふれ、優しい心が皆に見えた。いつもある日常と異なることを行う時間は、人間の成長に必要不可欠であると再認識することができた。私が教師となり、多くの学びを伝えていくが、学校外から学ぶことの大切さを多くの方と共有していきたいと考えている。（大学生）

※子どもたち・大学生の感想から、体験活動の中でも、みんなで協力（協同？）して行ったバームクーヘンづくりが一番楽しかったとの感想があった。日常で、何か一つのことをみんなで協力して行う体験が少ない？意識していない？からか。

様々な体験、準備、ものづくりの中で、子ども同士、子どもと大学生、大人と協同する良さを感じることができたのではないか。

その後、子ども・大学生の変化（やりたいこと、やれることを言える。関係性が深まり。高校生が学習会に参加など）に繋がっている。

■ 今後の目標と課題

体験活動後に振り返りを行い、参加者の感想から、今後も体験活動を継続したいという話になっている。継続のためには、体制づくりやプログラムの充実、資金の確保が必要。

	項目	着眼点
1	継続の為に体制づくり	・賛同団体への勧誘 ・ボランティアの募集(CSAの活用)
2	プログラムの充実	・地域の文化の掘り起こし
3	地域と連携する展開	・自治体との連携 ・名古屋周辺地の任意団体との連携

秋の生活・自然体験活動 報告

生活の中で工夫して自然を生かす体験



2021協同集会in東海
体験型分科会

秋の生活・自然体験活動

• 体験活動 実施状況

日時：2021年11月28日（日）

場所：季の野の台所（チャットに紹介動画リンク貼り付けています！）

参加人数：15名（中高生6名、大学生2名、大人7名）

ワーカーズコープが運営する学習会に参加する子ども・大学生を対象

そもそも何で分科会で体験活動…？

今回の体験活動は、2014年から始まった協同集会in東海で**協同を実感できる行動をできないか？**というNPO法人マルベリークラブ中部、藤澤さんの思いから始まり、繭のいろは、季の野の台所をご紹介頂き、体験活動を企画しました。
これまでも、それぞれの活動に参加することはあったが…。

体験活動の目的

- ・ 体験活動は、コロナ禍により広がる子どもたちの体験・機会の格差縮小
- ・ 自然の中に人も加わっているという意識を取り戻し、桑・蚕・繭の歴史的歩みを辿りつつ、ヤギ等の多様な命に触れ、他者への感謝の気持ちを再認識する
- ・ 自然循環のものづくりを体験し、子どもたちが生活の知恵を学び、自らの役割と協同を実感すること

体験活動の内容

- ・ コロナ禍により広がる子どもたちの体験・機会の格差縮小のため、体感型農業を営む「季の野の台所」で桑・蚕・繭に物づくりや生活体験を行いました。

詳しくは、森川さんより報告があります！
野外体験(ヨガ)
創作活動(ミサンガづくり)
調理体験(バームクーヘン・海鮮BBQ)



季の野の台所
ホームページ



企画をみんなで考えて



2030年に欲しいもの(都会人約800人へのアンケート)

- ① 安心・安全な食=食の自給自足
- ② 信頼できるコミュニティに一員であること
- ③ 安心・良質な子育て環境

裏を返すと、今、特に都会にないものに通じる事柄

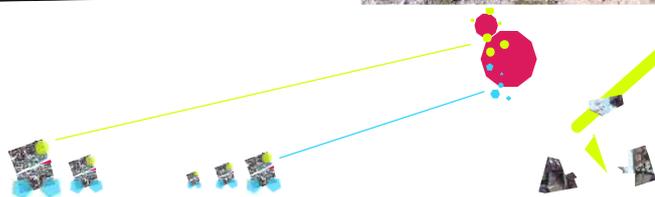
- | | |
|---------------|-----------|
| ■ テーマ | ■ 着眼点 |
| ① 食の自給自足 | ① 休耕地の活用 |
| ② 信頼できるコミュニティ | ② CSA(協働) |
| ③ 安心・良質な教育環境 | ③ 学習支援 |

具体的検討グループ

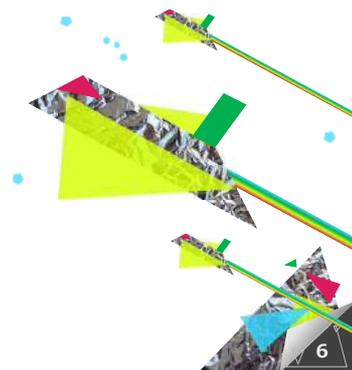
NPO法人マルベリークラブ中部
繭のいろは
季の野の台所
NPO法人ワーカーズコープ



季の野の台所 生活の知恵がいっぱい



野外活動(田んぼでヨガ)…みんなでヨガをしてリフレッシュ!



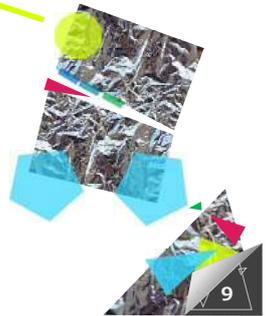
桑・蚕・繭のお話 ミサンガづくり



調理体験準備！ 火おこし、薪割



調理体験 バームクーヘンづくり



参加者の感想

- 中学3年で、最後の機会と思い参加した。すごく楽しみにしていた。参加者同士で普段できない会話もでき、良い体験ができた。(中3)
- 薪割りをして、できた時は凄くうれしかった。(中2)
- 自然体験ということで何も知らない土地の自然で全力で楽しむことの重要性を感じることができた。今まで学習会の中でしか関わりを持っていなかった子どもたちが自然に触れることで新しい一面を見ることができた。(大学生)
- 薪割りや竹などを触り、自然にふれ、優しい心が皆に見えた。いつもある日常と異なることを行う時間は、人間の成長に必要不可欠であると再認識することができた。私が教師となり、多くの学びを伝えていくが、学校外から学べることの大切さを多くの方と共有していきたいと考えている。(大学生)

※子どもたち・大学生の感想から、体験活動の中でも、みんなで協力(協同?)して行ったバームクーヘンづくりが一番楽しかったとの感想があった。日常で、何か一つのことをみんなで協力して行う体験が少ない?意識していない?からか。

今後の目標と課題



NPO法人マルベリークラブ中部

繭のいろは

季の野の台所

NPO法人ワーカーズコープ

体験活動後に振り返りを行い、参加者の感想から、今後も体験活動を継続したいという話になっている。継続のためには、体制づくりやプログラムの充実、資金の確保が必要。

1 継続の為に体制作り

・賛同団体への勧誘 ・ボランティアの募集(CSAの活用)

2 プログラムの充実

・地域の文化の掘り起こし

3 地域と連携する展開

・自治体との連携 ・名古屋周辺地の任意団体との連携



ご清聴ありがとうございました



自然を工夫して生活の中に活かす体験会の実施

2030年に欲しいもの（都会人約800人へのアンケートによる）

- 1, 安心安全な食=食の自給自足
- 2, 信頼できるコミュニティーの一員であること
- 3, 安心・良質な子育て環境

裏を返すと今、特に都会にないものに通じる事柄である。



地域の活性・再生の活動指針とする。

	テーマ	着眼点
1,	食の自給自足	休耕地の活用
2	信頼できるコミュニティー	CSA（協働）
3	安心良質な教育環境	学習支援



具体的検討グループ：NPO ワーカーズコープ、季の野の台所（美浜町市民団体令和4年桑苗300本植栽）：繭のいろは、NPO マルベリークラブ中部

プログラムの設定

- ・ヨガ体操、火起こし、薪割り、竹材によるバウムクーヘンづくり、海鮮バーベキュー、
 - ・桑・蚕・繭のはなしと活用〔ミサンガづくり〕
- 場所：知多郡美浜町字豆池地内 季の野の台所施設
活動時間：AM:10~PM3

今後の課題と目標

	項目	着眼点
1	継続の為に体制づくり	・賛同団体への勧誘 ・ボランティアの募集(CSAの活用)
2	プログラムの充実	・地域の文化の掘り起こし
3	地域と連携する展開	・自治体との連携 ・名古屋周辺地の任意団体との連携

学校給食と地域

協同集会in東海 分科会報告
分科会：学校給食をオーガニックに

協同集会イン東海 分科会
学校給食をオーガニックに 報告 12月19日
報告者 熊崎

当日のプログラム（PM1:30～4:30）

1. グリホサートとネオニコチノイド：農民連分析センター**八田純人**さん
2. 「学校給食をオーガニックに」署名活動の報告：**菱川智恵**さん
3. 有機農業を進めるために：**服部晃**さん（給食ネットワーク代表）
4. 白川町学校給食用食材の生産：**長谷川泰幸**さん（ゆうきハートネット）
5. 有機野菜の配送：**亀山正法**さん（未来の給食をつくる♡ぎふ代表）
6. 生活クラブ生協の実践：**中野理事長**

三つのテーマの輻輳

- ・「学校給食をオーガニックに」のテーマでは、「**学校給食**」、「**有機農業**」そのものの課題と、それが重なる「**オーガニックへ**」という三つが輻輳し、どこに重点を置くかで議論が代わりますが、今回の報告では特に署名活動から始まる「**オーガニックへ**」に重点を置きます。（ネオニコチノイドやグリホサートなど農薬や慣行農業に対する有機農業の課題については、後日八田さんや服部さんの報告をもとに、白川町で実践や亀山さんのプロジェクト、また生活クラブ生協の報告も含め報告書を作成する予定です）
- ・ただ、八田さんが言及した「**市民科学**」という視点は、事実に基づく市民運動を進めるためには欠かせないものです。本来なら公的な機関や大学などに求められる課題です。
- ・また、服部さんの報告の中で言及された有機農業に関する**PGS（参加型保障システム）**については、新しい運動の課題として今後拡がる可能性を秘めています。
- ・PGSは生産者・消費者・その他関係者（ステークホルダー）と一緒に協議し、お互いの信頼のもと有機農業を認証する。基準は、各国のオーガニック基準（日本ではJAS認証の基準）以上とされる。従って農薬・化学肥料不使用、遺伝子組み換え技術不使用はもちろん、自然環境・労働環境・家畜の飼養環境などへ配慮が必要です。

学校給食をオーガニックにするための実践的課題

- ・また白川町で実際に学校給食に食材を提供している**長谷川さん**の報告では、「**公共調達**」のいくつかの課題があきらかになっています。今後の課題となります。
- ・また有機野菜のデリバリー事業の**亀山さん**の各務原での実証実験「**C-SOAデリバリーコミュニティ**」の試みには、注目したいと思います。
- ・生活クラブ生協の**中野さん**のまとめでは、消費者と生産者との「**食べる約束**」等生協の原点としての食の安全への課題と、まとめとしての「**地域の中での実践として学校給食**」は大切な視点です。

学校給食をオーガニックに 署名活動はどのように始まったか

2020年11月、白川町での安田節子さんの講演がきっかけになりました。菱川さんは、それをただ聞き流すだけでなく、主体的に受け止めて、子供たちに安心できる食べ物を与えたいという思いから、第一回お母さんたちへのシェア会を開き、意見交換の場として11人のライングループを結成した。有機農業に関わるエキスパート、「有機農業を考える会」服部晃さん（岐阜県農政部農産園芸課から委託）未来を作る給食♡ぎふ：代表亀山さん、養護教諭：奥村理恵さん、なずな農園：武山さんと出会いも、運動の支えになりました。岡山県でお母さんたちが8000筆を集め県議会で採択されたことを知り、「学校給食をオーガニックへ」の署名活動をはじめることになりました。目標は10、000筆にし、子宝のさとLINEグループ11人の協力のもと、一緒に活動できる人、90人以上あつまり、短期間に13000筆以上集まりました。この間に「食を守る人々」上映会9カ所で開催できたのは、ここで集まった仲間の協力があったからでした。県会への採択へ、ただし紹介議員の関係で、いったん中止となり、再度請願をすることに。

これからの課題として

- 分科会のための打ち合わせを何回か服部さん、菱川さんと行ってきました。当初の企画よりかなり課題が大きく膨らみ、実際に分科会全体では、それぞれの運動のつながり、連帯感のようなものを感じる事ができました。なんらかの形で継続した運動にできればと思います。
- 「たくさんのすばらしい方たちとの出会い、いろんな経験。私の人生に宝ができた」という菱川さんの思い。これはクロストークの中でさらに語っていただければと思います。
- 次の目標としては、署名活動でつながった多くの仲間たちとともに、実際にそれぞれの地域で、所属する自治体で学校給食をオーガニックにするという目標に向かって、また新しい出発があるように感じました。
- まず、県議会での請願採択にむけての課題があります。

協同集会2021in東海 分科会

2021.12.26

「高校生世代における学習等支援の現状と課題を探る」

地域における子どもの学びの
支援共同研究会

事務局 橋本吉広

開催趣旨：2017年の協同集会を契機に、**中学生の学習支援の交流・検討を目的とする研究会が発足し**、今年には視野を広げ、小学生の学習支援(9月)、高浜市での小学生、中学生・高校生の一体的な学習等支援(10月)を取り上げ、**今回は「高校生世代」の学習等支援に焦点をあてた検討を**しました。

小学生・中学生と比べ、進路が多様化し、また教育格差もひろがる高校生世代では、その支援課題も多様化するため、

- ① **高校生の生活実態を通し「高校生の貧困」についての理解を深め**
- ② **高校生世代への学習等支援の実践状況を明らかにし、**
- ③ **高校での教育実践における困難を抱える高校生世代への取り組みの実際に学ぶ**ことで、

これからの高校生世代の支援のあり方(その糸口)を探ります。



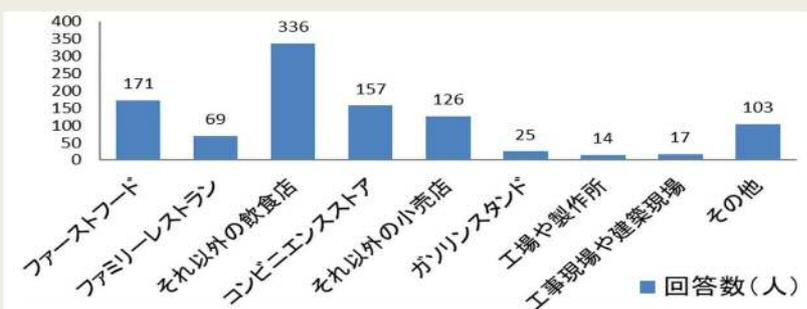
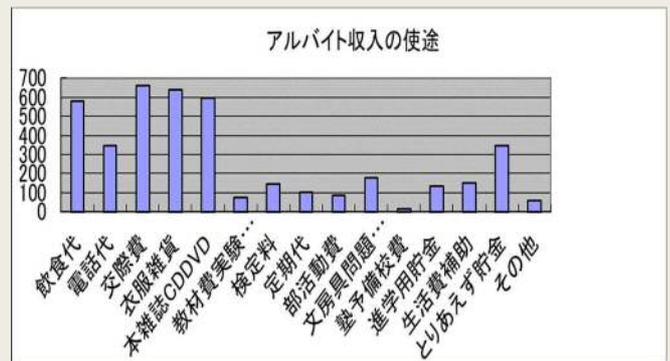
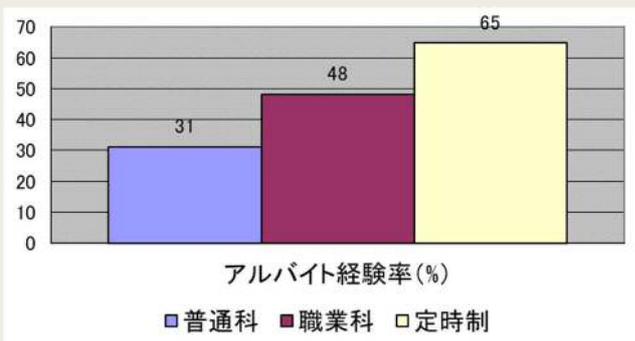
名古屋市「高校生世代の学習・相談支援事業」2016年度から24会場で開始され、2021年度には、市内150箇所543内訳：高1年254人、2年174人、3年115人；ひとり親世帯405人、生活保護世帯101、生活困窮世帯37人)の参加で実施されています。今回は、名古屋市からの委託事業2団体、自主事業1団体からの実践報告されました。

プログラム

- 9:30 **あいさつ** 地域における子どもの学び支援共同研究会の趣旨 研究会代表 南出 吉祥さん
- 9:40 **報告Ⅰ. アルバイト調査で見る高校生の貧困問題** 小島俊樹さん（日本福祉大学）
- 10:20 **報告Ⅱ. 「高校生世代の学習等支援」の現状 名古屋市など**
- Ⅱ-1 名古屋市の高校生世代の学習・相談支援事業の実際 寺子屋学習塾 本田直子さん
 - Ⅱ-2 自主的活動としての高校生世代の学習等支援の実際 ポトスの部屋 江場勝吾さん
 - Ⅱ-3 名古屋市の高校生世代の学習・相談支援事業の実際(名古屋市の学校内サロン推進事業補助金によるサロン運営を含め) NPO法人こどもNPO 山田恭平さん
- 11:00 **報告Ⅲ. 高等学校における教育実践(中退・進路指導を含む)～高校教員の立場から**
堀 直予さん(愛知県立定時制高校)
- 11:40 **Ⅳ【全体討論】 今後の高校生世代への学習等支援の課題と展望(筋道)を探る**
コーディネーター 南出吉祥さん（岐阜大学、研究会代表）
- 13:00 閉会

分科会は、オンライン開催で、地元以外にも八戸市・浦安市・静岡市・上田市・京都市各地から実践者・研究者など33名の参加で、活発な意見交換が行われました。

アルバイト調査で見る高校生の貧困問題



2010年10月～11月、名古屋市立高校を中心に県立・私立高校12校において、担任によりクラスの生徒に調査用紙を配布し、1752名分を回収した。

中学生の進路選択の変化

愛知県高等学校 設置者別の偏差値区分 (学科・コース区分別)

(参考) 全日制進学率の推移

区 分		2016 年度①	2021 年度②	②-①
進学希望率		93.9%	92.6%	▲1.3%
実 績 進学率	全日制	66,296	60,243	▲6,053
		90.4%	89.4%	▲1.0%
	定時制	1,464	1,170	▲294
		2.0%	1.7%	▲0.3%
	通信制	3,604	4,251	+647
		4.9%	6.3%	+1.4%

偏差値	県立高校	市立高校	私立高校	国立他	全体
70以上	2.7%	3.7%	1.4%	0.0%	2.2%
65-70未満	2.7%	11.1%	3.4%	0.0%	3.5%
60-65未満	9.4%	7.4%	6.2%	85.7%	9.4%
55-60未満	6.7%	0.0%	15.1%	0.0%	9.2%
50-55未満	9.4%	33.3%	13.0%	14.3%	12.4%
45-50未満	17.4%	22.2%	19.9%	0.0%	18.3%
40-45未満	41.5%	22.2%	33.6%	0.0%	36.6%
35-40未満	10.3%	0.0%	7.5%	0.0%	8.4%

出典：愛知県立高等学校再編構想(案)
2021年11月

出所：「みんなの高校情報」(愛知県・2021年版) より作成

高等学校における教育実践～高校教員の立場から

県立昼間定時制高校の役割

- ・ 基本的に、全日制に行けない生徒が入学するところ
- ・ 外国ルーツの生徒が年々増加
- ・ ひとり親家庭、困窮家庭がおそらく5割以上
- ・ 学びなおしの場
- ・ つながりなおしの場

高校を卒業する＝高卒の資格をとることの意義

- ・ 大学や専門学校への進学
- ・ 就職で「高卒以上」の求人にも応募できる
- ・ 「高卒」の給料体系
- ・ 「高卒」が必要な資格の取得
- ・ とりあえず多数派

困窮家庭の生徒への進路指導の実際

- ・生活保護家庭から就職→寮付きの仕事、免許がいる仕事
- ・生活保護家庭から進学→世帯分離が原則。早めに行政に相談し、進学のための貯金をする。使える奨学金はどんどん使う。
- ・デュアルシステムのある学校（観光業・調理・保育・介護など）を探るか、バイトしやすい条件の場所等を選ぶ。
- ・奨学金のある分野（介護・保育・看護）を選ぶ。
- ・入学金・入学時納付金の納入時期をにらんでお金の算段。学生支援機構の予約奨学金は5月入金なので間に合わない。
- ・就職は、最初の1か月の交通費と食費を貯めさせる。

高等学校における教育実践・進路指導などから「学習等支援」に期待すること

高校になくて地域にあるもの



高校生世代では、高校を拠点にした地域連携が大切か

こんな場所があったらいいな(妄想)

いろんな社会人と出会える

バイトができて、バイト後に勉強を教えてくれる

友だちと一緒に行ってOK
ひとりで行ってOK

テスト前だけ助けてもらうことができる

夢を聞いてもらえる

大学進学のための勉強を教えてくれる。相談に乗ってくれる

送り迎えしてくれる

パソコンやタブレットを自由に使える、教えてもらえる

情報がいろいろあって、中退後、高卒後の進路の相談にも乗ってもらえる

学生・若者と協同を学ぶ

※テーマ・ゲストは協同集会和共通

A大学「ボランティア入門」

わいわい子ども食堂
学習支援NPOポトスの部屋 10名
 居場所 Caféわたぼうし
 ジュニア奉仕団とココボラ（学生の経験）

高齢者生協・ケアセンターほみ
難民支援と食料支援 70名

中山間地域の拠点 新城市・やなマルシェ
 行動する市民の力 NPOエム・トゥ・エム
 ボランティア経験 協同労働の働き方

高齢化する団地 くらしたすけあいの会
 都市近郊 ささえあいの家（八木山地区社協）
 人生100年時代 いなぶ健康アカデミー

小2で避難してきた大学生の近況
 原発事故と避難 対話と傾聴
 津波被害と避難 災害にどうむきあうか

B大学「協同組合論」

JAひまわり（産地）訪問～クリスマスに花を！
 フラワーアレンジをキャンパス・家庭で

地域と協同の研究センター向井忍

■日本はこれから「人口減少社会（生産年齢減少型・少子・超高齢・多文化社会）」に進みます。

授業をうけて、あなたの仕事（職業選択）に関する考えを教えてください。（120名）

問1「これからの社会で、重視してほしい」と考える「仕事」 **（4つ選択）**

問2「あなたの考えや価値観、希望に近い」と考える「仕事」 **（4つ選択）**

設問	問1	問2
海外に進出し、国際的にも成長していく企業での仕事	50	35
国内に住む人々の、生活や消費力をたかめる仕事	79②	63⑤
高度な仕事を担えるAI（人口知能）、ではできない仕事	52	53
企業が求める「高度人材」や「柔軟な働き方」をする人材としての仕事	26	28
若者も高齢でも、男性も女性も、多文化（多国籍）で働ける仕事	100①	73①
多くの人があつまる三大都市圏に、営業所や本社がある会社の仕事	11	19
実家や家族の近くで、規模にかかわらず社会に役立っている会社の仕事	47	70②
自然に近い環境のところで、自分らしい生活設計ができる仕事	31	42
安定していると思われる、知られた企業や公務員としての仕事	28	52
地域・社会で、市民・企業・団体との協働を促進できるような仕事	73③	59
その他		
	289	494

高度人材・柔軟な働き方
 AIではできない仕事

安定

国内消費

海外・国際的成長

身近な地域

三大都市圏

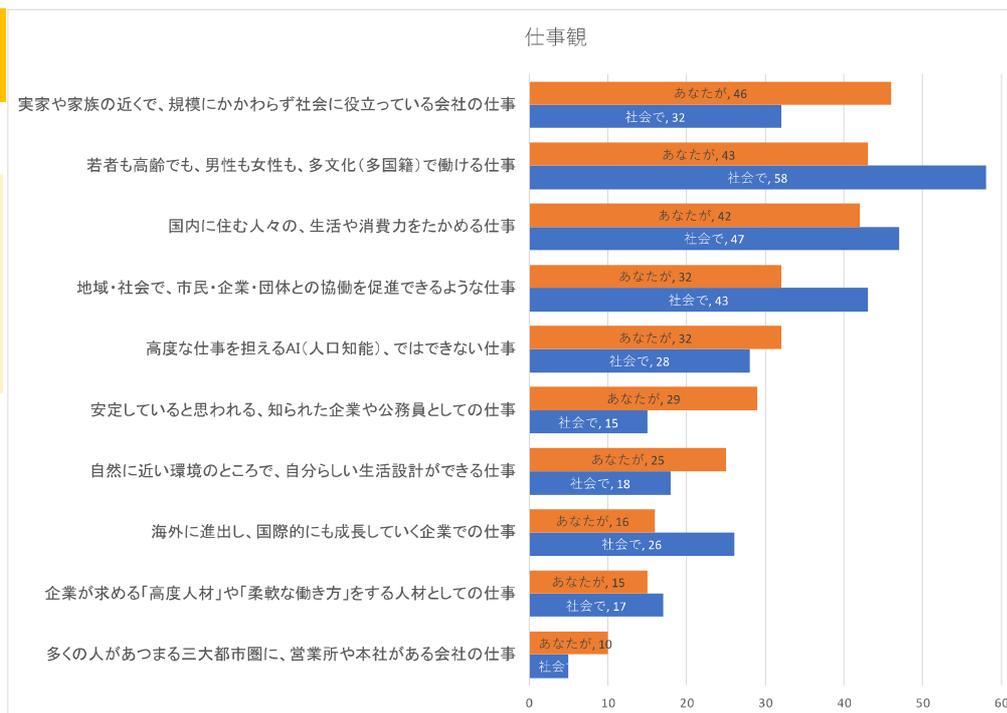
自然

協働を促進

多様・多文化な働き方

■仕事観の変化の有無（記述）
127名中

1：変化した	57（45%）
2：少し変化した	20（16%）
3：元々の考えに確信	16（13%）
4：変化しないが考え方に影響	5（4%）
5：変化していない	22（17%）
NA	7（6%）



■問4：あなたの仕事観（問1と問2で選択した項目）は、この授業を受ける前と比べて、変化していると思いますか？それとも同じですか？

1：仕事をするにあたり、自分のなかでどう働くかということを考えていましたが、人のため、何かのためということが大切なのではないかなと思うようになりました。どうしても自分の働きやすい環境というのを重要視してしまいましたが、それもととても大切なことだと思いましたがそこにプラスで周りのことを考えられると自分の中でより充実した働きかたができるとおもいました。

1：変化していると思う。仕事は報酬をもらうために行うものだと考えていたが、報酬をもらわなくてもやりたいと思える仕事に価値があり、ボランティア活動のように誰かの笑顔のために行うことが仕事の意義であると考えようになった。ボランティアの活動は拡大しており、ボランティアは独自の役割があるため会社がボランティアを主催し、実際に消費者と関わることも今後社会が行うべきことではないかとも考える。

1：私の仕事観は、この授業を受ける前と比べて変わったと考える。この授業を受ける前は、どんな職業でもいいから、自分でお金を稼いでそれなりに仕事が出来れば良いと思っていた。でもこの授業を受けて、地域に貢献した仕事が出来たらいいなと思うようになった。それはボランティア経験を通して人の居場所を作ることの大切さを学んだからだ。

1：変化したと思う。大学に入る前からAIなどの人工知能にはできない人の役に立つ仕事に就くことを目標としていた。しかし大学に入ってからの半年間将来のことについて考えずに単純作業のような日々を過ごしていた。夏休みもそうだった。しかし、本講義を受けて将来のことについて考える機会がかなり増え、難民食糧支援の箱詰め作業にも参加して自分の労力が人の役に立つことを以前よりも願うようになったからだ。

2：多少変化していると思います。とくに多国籍の人々が働ける環境というものの必要性を授業を通して強く実感したからです。

2：少し異なっていると思う。この授業をうけて、人との繋がりが生きていく上でどれほど大切なものなのかを理解できた。お金ではどうすることも出来ないことを繋がりによって解決できたり、乗り越えられることを沢山学べた。現在はコロナ禍でもあり、社会がこういった苦難を乗り越えるにはやはり、繋がりというものが大切なんだと実感した。

3：変わりません。周りに根底に役立ったり足になる仕事をしたと考えていたけれど、こんなにも知らないところでたくさんの方が活躍していたり困っている人がいると知った。

4：安定した職業に就きたいという考えは変わらないが、それを通して高齢者や障害を持った方の支えに少しでもなれる機会があったらいいなと考えるようになった。

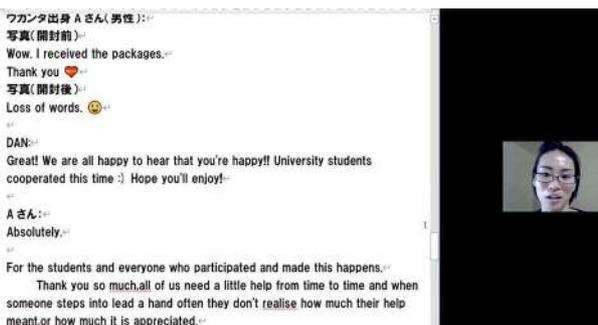
5：あまり変化していないように感じる。しかし、自分が持っていなかった多くの意見を学ぶことができた。

難民食料支援に参加して 一受講生の感想

12月11日（土）箱詰め作業 9名に発送



12月14日（火）到着しての返信



12月21日（火）報告動画を見て

- 活動して終わりせず、どうなったかその後の掲載してもらいありがとうございます。私個人としては受けているどの授業よりも学びが多かったと思っています。
- 羽田野さんから実際に届いたというお知らせを聞き私たちの思いが届いていると思うと嬉しく感じた。
- 難民食糧支援のボランティアは、どんなに小さくてもボランティアに関わる機会がいただけただけなので感謝しています。
- 私は箱詰めなど当日は参加できなかったけど、授業に食べ物を持ってきて難民食糧支援に少しでも参加できたのはよかったです。
- ボランティアは、難民の方々をつなぐ役割を果たしているのだと思います。
- それぞれグループを作って話し合いながら作業できるのはとてもいいと思いました。
- 自分が思っていたより食べられないものに注意して仕分けをすることの大変さが分かったので、今度は食料やメッセージをもって仕分け作業にも参加して力になりたいと思った。

B大学「協同組合論」感想

ゲスト講師ワーカーズコープ東海事業本部 岡田俊介さん

●協同して働くことについてのお話を聞き、資本に縛られた働き方ではなく自ら働くことでたくさんのことが得られることを感じました。実践例で居場所のない障害のある20代女性が児童館に来たけれど18歳までしか入館できないのでそのまま追い返すのではなく居場所がないからボランティアなら児童館にいてもいいんじゃないかということでその女性はボランティアをすることになり、そこからその女性の働きたいという気持ちから、その女性を取り巻く環境を考え、働く場を作ることで新たに困っている人を救っていているという話を聞いて一人の困ったから働く場を作るという良い連鎖が生まれたのは、**ただ支援するのではなくその人自身が自立していけるような環境作りがあったからだ**と思い、その人にとっての支援は過ぎしやすい環境を整えていくことが大切であると考えました。

●仕事を通して地域課題解決と社会貢献をしていくということで、今の時代は便利な時代へと変化しているが、その変化についていけない人やあぶれてしまう人も多くいるため、そのような人に寄り添いながら協同して働ける社会を目指していくことは非常に大切なことだと思う。**地域課題を解決するために仕事をすると、儲けることへの嬉しさだけでなく、人を助けることのやりがいを感じることもできるため、二つのやりがいを経験できる良い働き方だ**と思った。